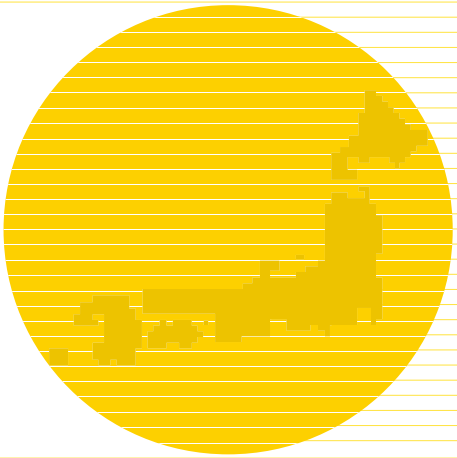
文化芸術を復興の力に



文化芸術による復興推進コンソーシアム

設立シンポジウム報告書

ARTS
AND
CULTURE
CONSORTIUM
FOR
RECONSTRUCTION

「文化芸術による復興推進コンソーシアム」設立準備事務局

平成24年3月

本報告書について

東日本大震災後、文化関係の団体で「復興支援のために何ができるか」について意見交換をしました。これをきっかけに文化庁の呼びかけで関連団体が協議を続け、平成23年10月、「文化芸術による復興推進コンソーシアム」設立準備事務局が設けられました。以来、文化芸術に関係する団体・個人等から多くの賛同が寄せられるなか、平成24年２月には設立準備委員会が発足し、組織のあり方や活動内容等の検討が続けられてきました。

平成24年3月13日には、東京国立博物館「平成館・大講堂」において、コンソーシアム設立に向けての記者会見及びシンポジウムが開催され、４月からは復興推進コンソーシアム運営のための新組織が立ち上がり、具体的な取り組みが始まります。

本報告書は、これまでの復興推進コンソーシアムの設立プロセスを踏まえ、上記記者会見及びシンポジウムでの内容・配布資料、設立準備事務局調査などをもとに構成したものです。

明日への希望につなげるために

文化芸術による復興推進コンソーシアム　ご賛同への呼びかけ

我が国に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、既に多くの月日が経過しました。

お亡くなりになられた方々にあらためて哀悼の意を表するとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。

被災地では、復興に向けた取組が進みつつある一方で、今なお、地域の復興や再生にあたって多くの困難や課題が残されていることも事実です。震災後、多くの方々が、被災地に思いを馳せ、何ができるかを自問し、できることを行動に移してきました。それらの活動は、何より、日本人の優しさ、連帯感を示すものでした。

文化芸術の分野も例外ではありません。震災直後から国内外で、時には被災地を含め、各地で被災者の方々を勇気づけるための文化的催しが数多く行われました。

私たちは、未曾有の大災害のなかで、生きるよりどころを失い、将来への希望をなかなか見出せないでいるような時でも、文化芸術には人々の心に直接働きかけ、生きる力を呼び起こす力があると確信しています。そして、これから被災地の復興と再生に向けて着実に前進していくために、中長期にわたる文化芸術による継続的な支援は一層、必要となってくるものと考えています。そこで、私たちは、団体や個人が被災地の復興のために活動の分野や立場の違いを超えて集い、中長期にわたって文化芸術による復興への取組を推進する組織として「文化芸術による復興推進コンソーシアム」を創設することと致しました。

このコンソーシアムは、文化庁をはじめ、芸術家、芸術団体、文化施設、助成財団、企業、NPO法人、芸術系大学、文化ボランティアなどが、被災地の復興・再生の状況や被災者の求め等について情報を共有し、それぞれの特性を活かしながら、密接な連携協力のもとに文化芸術活動を展開することによって、被災地の復興に寄与することを目的としています。

コンソーシアムは、被災地の皆様が感じていらっしゃる大きな悲しみなどを、これからの復興に立ち向かう力へと変えていただくために、日々の生活の中で文化芸術に触れたり、地域の再生やまちづくりに文化芸術を活かすなど、文化芸術が中長期間にわたって復興にお役に立てる機会や環境を創出していくことを目指しています。こうした連携のしくみは、今回の大震災を越えて、日本全体を元気づけていく重要な推進役にもなり得るものと考えます。

趣旨をご理解いただき、多くの文化芸術関係者、関係団体の皆様にご賛同賜れば幸いです。

文化芸術による復興推進コンソーシアム
呼びかけ人　一同

呼びかけ人

（50音順）

近藤誠一	文化庁長官
都倉俊一	一般社団法人日本音楽著作権協会会長
野村 萬	社団法人日本芸能実演家団体協議会会長
日枝 久	社団法人全国公立文化施設協会会長
福原義春	公益社団法人企業メセナ協議会会長
宮田亮平	東京藝術大学長
茂木賢三郎	独立行政法人日本芸術文化振興会理事長

賛同者

コシノジュンコ	デザイナー
小林研一郎	指揮者
紺野美沙子	俳優
新沼謙治	歌手
西田敏行	俳優
原田直之	民謡歌手

ほか

届けよう、被災地復興への思い。

■呼びかけ人・賛同者からのメッセージ

近藤誠一
（文化庁長官）

東日本大震災から一年が経過し、復興の過程における文化芸術の果たす役割の重要性への認識が日増しに高まっています。これまで文化庁では被災した文化財の応急処置や修復をしてきましたが、今後は復興に携わる方々の心の支えになる文化芸術活動が重要になってくるでしょう。官民が総力を挙げて人材と財源、才能を投入できるしっかりとした体制をつくり、これからの復興の過程に文化芸術の力を投じていく。その共通の目的を達成するために、多様な組織が集まって知恵や力を出し合っていこうと、本コンソーシアムを立ち上げました。幅広い文化芸術分野で、地元のさまざまなニーズに立ったお申し出をうまくつなげていくことは簡単なことではありませんが、それこそこのコンソーシアムがなすべきことだと考えています。皆様のご参加・ご賛同をお待ちしています。

野村 萬
（社団法人 日本芸能実演家団体協議会会長）

能の大成者である世阿弥は、芸能とはすべからく多くの方々に愛され、親しまれ、そしてご支持を頂戴しなければならないという趣旨の言葉を残しております。そのご支持によって何百年という伝統を経て今日があるわけでございますので、このたびの国難にあたって私どもは、芸能のもてる力をしっかりと発揮して、これまでの恩返しの心でご奉仕をしなくてはならないと思っております。コンソーシアムの事業内容に「つどう・つなぐ・つたえる・しらべる・つづける」と書かれております。伝統や伝承というものを通じて養われた心を大切にし、一過性に陥ることなく、芸能のもつ活力を信じて、皆様とともに参画をして参りたいと思っております。

都倉俊一
（一般社団法人 日本音楽著作権協会会長）

私は幾度か被災地を訪問いたしました。想像を絶する辛い状況の中で、被災した方々が強調されたのが「心を和ませたいのだ」ということでした。芸術は、これから被災者の方々に最も大切なものになると思います。物の復興、町の復興とともに心の復興を成し遂げるために、音楽家として何かご協力できるのではないか。素晴らしい絵や日本人の遺伝子の中にある伝統芸能、また我々の音楽、こういうもので被災者の方々の心の復興を少しでもお助けできればと、私は願っています。今まで我々は別個に活動してきましたが、共通の目的をもつ者がゆるやかに集って力を合わせるというコンソーシアムへの呼びかけに対し、非常にありがたく賛同させていただきます。

紺野美沙子
（俳優／朗読座主宰／国連開発計画親善大使）

昨年3月11日以降、実演家の一人として無力さを感じていましたが、近藤長官の「こんなときだからこそ文化芸術にできることがある」というお言葉に背中を押され、自分らしくできることは何かを考えてきました。私は2年前から朗読座という朗読の活動をしています。生きていると辛いことや悲しいことがあるけれど、美しい物語や音楽を通じて、ひとときだけでも心穏やかな時間を過ごしていただきたいという想いで始めたものです。今年2～3月、朗読座の公演で東北3県を回ってまいりました。何か活動を始めたくても、きっかけがつかめない文化芸術関係の方も多いと思います。このコンソーシアムの設立が、支援への第一歩を踏み出すきっかけになればと思っています。

拡げよう、文化芸術の“絆”

宮田亮平
（東京藝術大学長）

東京藝術大学では3･11以降、文化財、文化芸術に特化した募金活動を始めました。また、文化庁による文化財レスキュー事業に協力しています。目的が明確である活動のほうが、今後、中長期的に続けていけると思います。同時に大学としては、次世代を担う学生たちの今後の生き方についても考えます。震災以後、白いキャンバスから一瞬にして変わってしまった黒いキャンバスに、何が描けるのか、何がつくれるのか。その目線を備えていかなくてはいけない。これは全国の大学に共通していることでしょう。息の長い人間関係をつくれる若者を育成しつつ、多くの人を巻き込んでこのコンソーシアムに参加していきたいと思います。

コシノジュンコ
（ファッションデザイナー）

この一年間、私なりに考えて支援活動をしてきました。思ったこと、できることを、皆が心を一つにしていくことが大切ですが、一方で、今後ずっと続けていけるのかという気持ちもあります。復興は長期計画でいくべきことです。現地の方たちの「仕事がない」という言葉が印象的でしたが、それは将来の元気の源がないということ。私たちにできるのは、東北独特の文化を立て直し、文化都市として再建するという前向きの大きなビジョンを立てて実行することだと思います。3･11を忘れないための素晴らしい計画を協力してつくれば、都市にまた産業が生まれるかもしれません。そして、皆でそれを実行していく“やる気”こそが大切なのだと思います。

福原義春
（公益社団法人 企業メセナ協議会会長）

私どもはこの一年、GBファンドを設立し、寄付を被災地の文化芸術活動に助成する仕組みで復興支援に取り組んで参りました。お陰様で募金総額は6000万円を超え、これまで89件の活動に約4600万円の助成を行いました。その中で、地元の伝統文化を絶やさず続けていこうという気持ちが、震災で分断されたコミュニティを再び結束させることがわかりました。そういう意味で、震災復興において文化による地域再生は重要なテーマです。私どもは現地の必要性に応えてファンドを運営してきましたが、被災地のニーズは変化を続け、支援要請は途切れていません。一方で震災に対する関心は落ち着いてきています。その中でこのコンソーシアムは、文化芸術における震災復興に対する社会からの関心を高め、被災地に寄り添った支援を続けていくプラットフォームになると思っています。

茂木賢三郎
（独立行政法人 日本芸術文化振興会理事長）

私どもは国立劇場の運営管理を行っています。平成23年度の計画では振興会全体で文化芸術による支援に取り組むことを明確に示し、国立劇場、国立演芸場に被災者の方々をご招待したり、新国立劇場、国立能楽堂による被災地での公演や体験教室なども開いたりしました。今後も『国立劇場チャリティー歌舞伎公演』や『小中学生のための歌舞伎入門教室』の開催が決まり、助成事業の分野でも支援ができないかと動き出しております。これまで私どもは、当振興会の各事業に有効な手立てを加えて被災地復興支援の一助となるよう進めてきましたが、今後は本コンソーシアムとしてできることについても、本日ご出席の皆様と検討を進め、被災地の方々のお気持ちを踏まえて、息の長い支援を行っていきたいと考えております。

（記者会見での発言順）

復興推進コンソーシアムが目指すもの

これまで東日本大震災からの復興に向けて、文化芸術関係者による個別のさまざまな支援活動がありました。しかし、その一方で、継続的に続ける難しさなど課題が浮上しています。息の長い支援を考えたとき、構造のしっかりした組織が必要です。そこで、官民で立ち上げられるのが「文化芸術による復興推進コンソーシアム」です。

文化芸術にかかわる多くの団体・個人の結集により、ゆるやかな連携組織として、被災地の中長期的な復興推進に寄与していく。これを目的に、今後、被災地での文化芸術活動やニーズなど情報を共有し、それぞれの個性を生かして、息の長い継続的な文化芸術的な活動を展開していきたいと考えています。

文化行政による復興推進コンソーシアムとは（記者会見時配付資料）

文化芸術に関わる団体、芸術家、文化施設、助成財団、企業、NPO法人、芸術系大学、ボランティア、国（文化庁）、地方自治体等が立場を超えて集い、中長期にわたり文化芸術による復興への取組を推進する組織です。地域の文化芸術の再生や存続、コミュニティの再構築を実現、文化芸術面から地域を活性化し、まちづくりを推進していくことを目指します。

基本方針

中長期的に文化芸術による復興に向けた活動を推進するために、被災地の復興・再生の状況や段階に応じた被災地の求めが何かを把握し、それを全国各地のさまざまな分野の個人・団体と共有し、連携しながら活動していきます。

活動の基本スタンス

被災地と十分に連携・協力し、被災地から真に求められ、喜ばれる、質の高い支援を行います。
一時のパフォーマンスで終わることなく、じっくりと息の長い継続的な支援を行います。

主な事業内容

「つどう」「つなぐ」「つたえる」「しらべる」「つづける」をスローガンに下記の事業を実施します。

つどう	文化庁、芸術団体、芸術家、文化施設、助成財団、企業、NPO法人、芸術系大学、文化ボランティアなどが結集し、人的・組織ネットワークを形成します。
つなぐ	被災地の復興状況を現地調査・ヒアリング、モニタリングなどを通じて的確に把握をすることで、被災地の求めに則した文化芸術活動が可能な環境づくりにつなげます。
つたえる	被災地等における団体や個人の自主的な文化芸術活動を支援するため、総合的な情報ネットワークを構築し発信するとともに、広報活動、個別相談等により、必要な情報とノウハウを伝えます。
しらべる	中長期的な視点から、復興推進のために文化芸術がどのような役割を担っていくべきか、調査研究を行い提言します。
つづける	継続的な文化芸術活動による復興推進を行うために、人材や財源の確保、並びに制度的なあり方について検討します。

被災地の活動団体

文化ボランティア

情報交換

情報共有

被災した方々

文化庁（国）

芸術系大学

芸術団体・アーティスト

助成団体

文化施設

調査･研究

被災地の子ども・学校

コラボレーション

企業・NPO法人

海外の支援団体・アーティスト

写真（左上より）：仙台フィルハーモニー管弦楽団 復興コンサート 撮影：佐々木隆二／民俗芸能 虎舞（釜石）／「荒井良二とふらっぐしっぷ」 写真提供：akaoni Design、東北芸術工科大学／ARC>T 夢とらっく劇場　撮影：Art Revival Connection TOHOKU ／ NPO芸術資源開発機構主催・企画「ぼくらの粘土島！」@南相馬（安藤栄作、高野正晃）／ARTS for HOPE「ハッピーペインティングプロジェクト」／NPO法人JCDN復興支援プロジェクト「からだをほぐせば、こころもほぐれてくる」@会津若松（C.I.co 勝部ちこ、鹿島聖子、Rico）／アート･インクルージョン　クリスマスプロジェクト2011(仙台)／パソナ・東北こどもオーケストラ

信じよう、文化芸術の力。地域と

■ シンポジウム「文化芸術を復興の力に」発言録（抜粋）（平成24年3月13日、文化芸術による復興推進コンソーシアム設立シンポジウム第2プログラム）

シンポジウム「文化芸術を復興の力に」（東京国立博物館平成館大講堂）

■パネリスト（50音順）
赤坂憲雄（学習院大学教授／福島県立博物館館長／元東日本大震災復興構想会議委員）
大澤隆夫（仙台フィルハーモニー管弦楽団専務理事）
近藤誠一（文化庁長官）
紺野美沙子（俳優／朗読座主宰／国連開発計画親善大使）
島田誠（アーツエイド東北評議員／公益財団法人神戸文化支援基金理事長／ギャラリー島田代表）

■ビデオメッセージ
奥山恵美子（仙台市長）

■モデレーター
本杉省三（日本大学理工学部建築学科教授）

（発言抜粋、順不同）

励まし、励まされる関係の共有

大澤　私たち仙台フィルハーモニー管弦楽団は、ガソリンや水などにも不自由していた震災後2週間目から演奏活動を開始しました。今しかない、待ったなしだと思ったからです。そんな思いにかられたのは、私たち自身が被災者だったからかもしれません。自宅が全壊・損壊したメンバーも多く、自分たちの折れそうになる心を支えるためにも演奏しなければならない、そう考えたわけです。

最初の復興コンサートは寺の境内のバレエスタジオでした。その後、街なかや避難所、学校で演奏を続け、今年2月末までに220回のコンサートを実施しました。マラソンコンサートと銘打って、37日間連続で復興コンサートを続けたこともあります。こうした演奏活動を継続するうちに、お客さんとの距離がどんどん近くなり、演奏側とお客様というセパレートな関係が一体化していきました。被災した人々をなんとか励ましたいと始めたコンサートですが、コンサート会場で「来週は××の避難所に行きます」と伝えると、大きな拍手が起こるようになった。「仙台フィル、がんばれ」という拍手です。私たちのほうが励まされていると感じる一瞬でした。

ともに“未来”をつくる

紺野　2年前に朗読座を旗揚げし、朗読と音楽、映像を組み合わせた公演を続けています。人間、生きていればつらいことや悲しいこともあるけれど、美しい音楽や物語を通じて、公演に来られた時間だけは心穏やかなひとときを過ごしていただきたいと思って始めた公演活動です。

しかし、昨年3月11日に起きた東日本大震災は、自分の無力さをいやというほど痛感させる出来事でした。それでも、自分にできることはないかと必死に考え続けた。そんなときに出会ったのが『さがりばな』という写真絵本でした。サガリバナは奄美大島以南の南西諸島に自生し、一夜だけ咲く美しい花です。花言葉は、「幸せが訪れる」。その神秘的な花に託された命の循環の物語をぜひ被災された方たちに聞いていただきたいと思い、今年2月末から3月初旬、東北三県を回る朗読座公演を行いました。

宮城県では、閖上（ゆりあげ）地区の方たちが暮らす仮設住宅の集会所で公演しました。大雪の日でしたが、閖上地区の人たちは集会所前にテントを立て、雪の中で炊き出しをしてくださいました。町内会のおばちゃんは「こんなふうに忙しくしていたほうが、いろんなこと考えないからいいの。来てくれて、ありがとう」と。つくっていただいた秋刀魚のつみれ汁は、これまで食べたことなのないほどの美味しさでした。

島田　17年前の阪神淡路大震災で、神戸は荒涼たる傷ついた地に変わりました。その1カ月後、私は『アート・エイド・神戸』という運動を立ち上げます。これは、草の根市民メセナです。市民でアーティストを支援し、その活動を蘇らせ、地域の文化活動量を回復していく。まず手がけたのは、芸術家緊急支援制度でした。市民たちから寄付を募り、80人を越えるアーティストに10万円ずつの支援金を贈りました。支援活動は5年間続き、総額8000万円の寄付を集め、最終的に100 を超える文化芸術活動の再開を支援しました。

私は、これらのお金の“エン”は“円”ではなく、志のご縁の“縁”だと思っています。地域のため、被災された方のためへの市民の支援は“志縁”です。

草の根市民メセナは、復興のための基盤をつくる一つの方法です。大きな組織とは別に文化芸術に特化した市民主体の小さな装置が地域に埋め込まれれば、地域の文化活動を潤す散水装置になります。震災1カ月後、仙台でも、私は「東北の文化を一番わかっている東北のみなさんが立ち上がってください。

今しかない、待ったなしだ。
被災者だからこそ、
そんな思いにかられ、
震災後2週間後から
演奏活動を開始しました。

大澤 隆夫　おおさわ・たかお

仙台フィルハーモニー管弦楽団専務理事。1947年、仙台市生まれ。2004年度から仙台市役所市民局理事（市民文化事業団副理事長兼仙台フィル専務理事）を務め、09年から仙台フィル専従。仙台市の仙台フィル支援強化、ジュニアオーケストラ立ち上げ、第2回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクールおよび仙台国際コンクールなどに従事。被災後は、いちはやく音楽で人々を励ます活動を展開。

仙台フィル復興コンサート
震災から2週間後の3月26日、仙台市・見瑞寺で演奏を再開した仙台フィルハーモニー管弦楽団。以後、220回を超える演奏活動を各地で行い、現在も継続中。演奏先で拍手を受けるたびに、音楽が人の心に「日常」を取り戻すきっかけになっていること、また、困難に立ち向かうエネルギーを補填していることを実感したという。

左：2011年4月に街なかで行われた演奏の様子
右：日本フィルと仙台フィルによる志津川中学校・志津川高校ブラスバンド部との合同演奏
写真：佐々木隆二

文化の力が人々の心を豊かにする。そのことが復興の大きな支援になるということを強く感じています。

奥山 恵美子
おくやま・えみこ（仙台市長／ビデオメッセージ）

1951年、秋田県生まれ。75年に仙台市職員に採用、市民局生活文化部女性企画課長、教育局生涯学習部参事（財団法人仙台ひと・まち交流財団メディアテーク館長）、市民局次長、仙台市教育委員会教育長、仙台市副市長を経て、09年8月から現職。現在、文化審議会第9期文化政策部会委員も務める。今回のシンポジウムは公務の都合で、ビデオメッセージで参加。

私たちはそれを全力で持続的に支援をさせていただきます」とお話しさせていただきました。その結果、アーツエイド東北が立ち上がり、市民による被災されたアーティストへの支援が始まっています。

文化芸術の力を信じたい

赤坂　震災後、自分の無力さに打ちのめされながらも、誰もが「自分にできることを一つでも二つでも探して、何かをしたい」という思いを共有して生きてきたような気がします。私は民俗学者ですから、この一年間、ひたすら被災地を歩き、村を訪ねては、おじいちゃん、おばあちゃんの話をうかがってきました。

昨日も1年後の被災地の姿を記憶にとどめたいと、海外沿いの被災地を歩きました。まだ何も始まっていません。町が根こそぎ失われたままで、瓦礫の山がいたるところに残っている。なかでも心苦しくなったのが、瓦礫の山と更地だけの土地を制服姿の高校生たちが黙々と歩いている光景です。この子たちは毎日毎日、瓦礫の山と何もない町を見ながら生きて、育っていくのだろうか、と。文化芸術の力を信じたくなるのは、そういう瞬間です。

近藤　震災直後から、文化芸術がもつ潜在力を復興過程でフルに活用したいと考えてきました。ただ、当初は迷いもありました。この時期に音楽や歌、落語などを再開していいのだろうか、文化庁にいるから文化芸術が大事だと思い込んでいるだけではないのか、と。しかし、自身も被災者である仙台フィルがいち早く演奏活動をはじめ、被災地の人々を勇気づけていると聞いて、文化芸術が復興に必ずや寄与するという信念をもつに至りました。

そもそも私には、これまでの60数年間、文化芸術の社会的役割が十分に生かされてこなかったという思いがあります。この復興推進コンソーシアムが良い成果をあげれば、東北の復興のみならず、今後の日本全体の活力、活性化につながると信じています。

奥山（ビデオメッセージ）　「多くの文化施設が損壊し、休館を余儀なくされるなか、仙台フィルが市内外の音楽関係者と一緒に復興に向けて立ち上がったことは、仙台市民にとって大きな励ましでした。仙台は“学都”であるとともに“楽都”です。仙台フィルの活動をきっかけに、『私たちもがんばろう』という気持ちが市民に広がっていくことを如実に感じることができました。また、仙台は“劇都”でもあります。舞台関係者がARC>T（アルクト）（アートリバイバルコネクション東北）を発足させ、被災地訪問や演劇の出前公演などに取り組んでいます。たんに家

ARC>Tの活動
Art Revival Connection TOHOKU（略称：ARC>T 通称：アルクト）は、震災後、宮城の舞台表現者たちが中心になり、設立された。子ども向けのワークショップやイベントへの協力、また、老人福祉施設、障碍者施設で「美術のじかん」や「ダンスのじかん」など造型や身体のアクティビティを提供。これらの活動を「出前部」と名付けて行っている。

左：絵本読み聞かせ、手遊び、体操
右：夢とらっく劇場

や職場の復旧に向けて気力を奮い立たせるだけでなく、文化の力が人々の心を豊かにする。そのことが復興への大きな支援になるということを強く感じています」

大澤　被災地であれ、その場所に出向いて演奏会を開くことは私たちの日常活動です。しかし、避難されている方たちは非日常の連続でした。私たちのコンサートは、非日常から日常に戻るきっかけを提供したのではないかと思います。

また、長きにわたる困難に立ち向かおうとしているとき、「東北人は我慢強いから」と一言でかたづけられるものではありません。私たちが届けてきた音楽は困難に立ち向かう心のエネルギーを補填してきたのだろうと思います。私たちの演奏にお客さんがスタンディングオベーションをしてくれることも多く、聴きにこられた方の気持ちが一つになって、その一体感から復興へのエネルギーが生まれています。音楽の、そんな力を実感しています。

赤坂　芸術系大学時代の教え子たちがボランティアとして被災地に入っています。彼らは「アートなんか、何もできない」という苛立ちにまみれながら、ひたすら瓦礫を運んでいる。その行為はとても尊く、応援もしたいのですが、おそらく彼らはアートや表現活動なしには生きていけない人たちです。けれど、絶望感から黙々と汗を流している。私の心のどこかには「君たちにしかできないアートで社会や被災地の人々に寄与して欲しい。今一度、アートの可能性を問い直し、自分の人生を紡いでもらいたい」という思いがあります。

島田　アート・エイド・神戸では、傷ついた建物に壁画を描く“壁画キャンペーン”なども展開しました。また、震災が起こった4カ月後、震災詩集を出しました。震災を目の当たりにして自分たちの言葉や詩への無力感を覚えた詩人たちは、「それでも言葉を紡ぐしかない」と結社の壁を乗り越えて一緒に詩集を出そうと動いた。それを私たちは応援したわけです。

震災詩集には100人を超える詩人たちが詩を提供し、第二弾、第三弾の震災詩集が編まれました。さらに、掲載された詩に感動した作曲家が曲をつけ、歌曲や合唱曲、器楽曲が次々と生まれていきました。加えて、震災前、神戸では詩の朗読会はそれほど盛んではありませんでしたが、震災詩集の発行を景気に朗読会が盛んになっていった。詩人たちは自分たちの言葉が確実に市民の心に届いていることを感じていたからです。

市民の支援は“志縁”。文化芸術に特化した草の根市民メセナも復興のための基盤をつくるためのひとつの方法です。

島田 誠　しまだ・まこと

アーツエイド東北評議員／公益財団法人神戸文化支援基金理事長／ギャラリー島田代表。
1942年、神戸市生まれ。76年、海文堂ギャラリー創設。91年亀井純子文化基金設立（翌年公益信託に）。95年「アート・エイド・神戸」創設。96年企業メセナ大賞奨励賞。2000年、ギャラリー島田と「アート・サポート・センター神戸」を創設。02年NGO/NPOのファンドレイジングのための「ぽたんの会」創設。11年、公益財団法人「神戸文化支援基金」として「アーツエイド東北」の設立に関わる。

竹下景子　詩の朗読と音楽の夕べ
— 3.11震災メモリアル・復興支援コンサート —

一般財団法人アーツエイド東北

震災で打撃をうけた東北の芸術文化を支える基盤をつくるために発足。被災した岩手・宮城・福島の芸術家・団体および活動を対象に、被災者支援の観点からの助成、また、個人・団体からの寄付を募ることと、支援を受ける側からのニーズ発信の場やしくみづくりを行う。

伝統的な祭りや民俗芸能は
被災地に生じ始めた
見えない対立や分断を
超える力を持っていると思います。

赤坂 憲雄 あかさか・のりお

学習院大学教授／福島県立博物館館長／元東日本大震災復興構想会議委員。1953年、東京都生まれ。東北文化論、日本思想史を専門とし、「東北学」を掲げて地域学の可能性を問いかけてきたが、最近は新たな近代思想史へのアプローチの道を探り始めている。震災後は東北の歴史と文化を踏まえ、東日本大震災復興構想会議委員として「復興への提言　悲惨のなかの希望」をまとめた。

コミュニティ再生における芸能の力

本杉　復興推進コンソーシアム設立準備委員会では、岩手県や宮城県、福島県で被災地の文化芸術活動現況や支援ニーズの把握のための調査研究会を開いてきました。同会議には、被災地での文化芸術活動やまちづくり活動に関わる団体関係者や行政・文化施設関係者が多数参加し、さまざまな意見交換が行なわれました。

なかでも、東北地方では民俗芸能が強いエネルギーをもっていることがわかりました。しかも、「もともと過疎化・高齢化が進んでいるところに、今回のような地震被害や津波被害が出て、コミュニティとしての活動がさらに難しさを増している」という声が多く聞かれました。今後の復興過程におけるコミュニティの再生や再結成と民俗芸能の復活は大きく関わってくると思います。

赤坂　津波が襲った海辺の地区を歩いていたとき、建物が流された家の土台の端に竹が挿してあることに気がつきました。これは神様の依り代で、竹を挿した人はここに戻ってこようとしているのかもしれません。そして、ふと顔をあげると、道路を挟んだ高台に卒塔婆が立っている。また、瓦礫の海のなかに鳥居だけが佇んでいる。被災地では、我々が普段きちんと語ろうとしてこなかった宗教の力にそこかしこで出会い、その光景に心打たれました。

被災地でいちはやく再開されたのも、祭りや民俗芸能です。人々は瓦礫の山から衣装や太鼓などを掘り起こし、懸命に汚れを落として、避難所などで芸能を行い、初めて皆で涙した。気が付くと、被災地のいたるとこで祭りや民俗芸能が復興していました。民俗芸能には鎮魂や供養というテーマが宿っています。だからこそ、そういう光景が生まれたのだと思います。

近藤　震災後、文化庁は直ちに文化財救出に取り組みました。国宝であるなしを問わず、民俗文化財は芸術的、歴史的な価値をもつとともに、地域の人々のアイデンティティの源であり、コミュニティのシンボルであるからです。

ただ、有形文化財はモノであり、目に見え、その被害を把握することは比較的簡単でした。一方、伝統芸能など無形文化財の被害の把握は簡単ではありません。しかし、東北は多様な伝統芸能を擁す地であり、それが現地の人々のアイデンティティとして根付いています。地域の伝統芸能や無形文化財については今も調査中で、今後、その復興を積極的に図っていきたいと考えています。

左：岩手県釜石市「釜石虎舞」
830年程前、鎮西八郎為朝の三男で陸奥の国を領有していた閉伊頼基が、三陸の武士の士気を鼓舞するために舞わせたのが起源といわれる。「ヨイヤサー」という威勢のよい掛け声と、静から動へと変化する演技が特徴。震災では保存会のメンバーも15人が亡くなり、道具も流出したが、残ったメンバーで地域の復興につなげようと、2011年7月に復興の祭りを行った。

中：宮城県東松島市「大曲浜獅子舞」
江戸時代、伊達家家臣の茂庭周防の命により伝わったのが始まりとされる。正月に地区内の家を回り、豊作や大漁を祈願する伝統行事で、津波被害により存続が危ぶまれたが、保存会の若手が継承を決意。2012年に新春祈祷が行われ、元住人200人が集まった。

右：福島県双葉郡富岡町「麓山の火祭り」
重要無形民俗文化財に指定されている伝統行事で、燃える松明を肩に担いだ男たちが山を登り、山頂の麓山神社に松明を奉納する勇壮な祭り。富岡町は福島県の浜通りに位置し、麓山神社が放射能汚染による警戒区域に指定されていて立ち入りができず、昨年は地域での実施はできなかった。かわりに隣接する大玉村の「おおたま夏まつり」で火祭りを披露したが、今後の維持・開催は不透明である。

赤坂　震災から1年目となる日、被災地で子どもたちに絵本を届ける活動を行っている女性と出会いました。彼女は金子みすゞさんの『大漁』という詩の話から始めました。大漁を喜びみんなで祭りをしている、でも海の底では鰯たちが弔いの祭りをしているという詩です。彼女は「今日、各地で行われている追悼集会は私たちにとって、とても遠い。私たちは海の底でひっそりとそれぞれに弔いの小さなお祭をしているような気がします」と言います。

そんな彼女の実家は神社で、「寺は死を弔う場所であり、お葬式の時はよそ者がずかずかと入ってこないように閉じようとします。でも、一方でお祭りや民俗芸能が行われる場所であり、たくさんの人たちが入ってくることを喜ぶ場でもあるんです」とも話してくれました。

今、被災地ではさまざまな分断や対立が生じ始めています。そうしたなかで、利害を超えて人と人とをつなぐものが、伝統的な祭りや芸能です。我々は民俗芸能に対して、過疎化や後継者不足で10年後、20年後には消えると思い込んでいましたが、民俗芸能や祭りは、見えない対立や分断を超える力をもっている。民俗芸能の新たな展開、可能性が見えてきたように思います。

復興推進コンソーシアムに求められるもの

近藤　今も多くのアーティストやボランティアが現地に行って、それぞれの分野で支援活動を続けています。政府がそれらの活動のすべてを把握し、課題解決を図ることはできません。であれば、多様な団体・個人が個々の経験や情報をもち寄り、共有していく。そうしたネットワークが中長期的に必要だと考え、復興推進コンソーシアム設立を呼びかけさせていただきました。

復興推進コンソーシアムは、失敗例も含めて、それぞれの立場で行っている支援活動で得た情報を共有し、再び個々の活動にフィードバックしていくための組織です。

奥山（ビデオメッセージ）「被災地はこれからたいへん長い復興の道のりを歩まなくてはなりません。マンパワーも限られ、財源にも厳しいものがあります。そうしたなかで、被災地を文化の力で支援していただくための復興推進コンソーシアムが立ち上がった。このことは私どもにとって、大変心強い、勇気の出る後押しです」

大澤　なぜ、いちはやく私たちの演奏活動がスタートし、しかも、日常的に継続できたのか。それは、プログラムの作成や間に挟むトークについての経験が豊富で、ライブラリアンやステージマネジャーといった専門スタッフがいて、

復興推進コンソーシアムが良い成果をあげれば、東北の復興のみならず、今後の日本全体の活性化につながると信じています。

近藤 誠一　こんどう・せいいち

文化庁長官。1946年、神奈川県生まれ。72年に外務省に入省し、外務省経済局審議官、OECD（経済協力開発機構）事務次長、外務省広報文化交流部長、国際貿易・経済担当大使、UNESCO（国連教育科学文化機関）日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使などを歴任。2010年7月より現職。震災後の自粛などの動きのなかで、文化芸術による復興支援を促すメッセージをいちはやく発信した。

**支援で一番求められて
いるのは想像力。
人々の暮らしを想像し、
痛みを共有し、
寄り添う人たちが増えることを
願っています。**

紺野 美沙子　こんの・みさこ

俳優／朗読座主宰／国連開発計画親善大使。NHK連続テレビ小説、大河ドラマ「武田信玄」「あすか」、舞台「細雪」をはじめ、テレビ・映画・舞台と多岐にわたって活躍。1998年からUNDP親善大使として途上国を視察するなど、国際協力分野でも活動。2010年より「朗読座」を主宰し、音楽や影絵、映像などと朗読を組み合わせたパフォーマンスを続けてきた。今年2～3月には東北三県を巡回。7月、舞台「日本の面影」（俳優座劇場）に出演する。

朗読座
紺野美沙子氏が主宰し、朗読と音楽、映像などのアートを組み合わせたパフォーマンスを行っている。東日本大震災以後、宮城県名取市閖上地区の仮設住宅の集会所、岩手県陸前高田市の避難所の体育館、福島県会津若松市でも公演。行く先々で現地の人々の心の暖かさにふれ、話をたくさん聞くことができた。公演を通じた交流の大切さを感じたという。

いつでもコンサートができるシステムがあったからです。そういう点で、オーケストラは機能的にできています。オーケストラのような組織がもつ仕組みや機能を参考にして、復興推進コンソーシアムでも、たくさんの芸術家の方が被災地に行けるシステムを確立していただきたいと思います。

●

紺野　東北3県の公演のときに非常に心苦しかったのは、運営面でのお手伝いを手弁当でお願いしてしまったことです。やはり、なんらかの制度的支援がないと、被災地での公演活動の継続性確保は難しい。復興推進コンソーシアムの支援が、現地の人々の気持ちをほぐすだけでなく、経済的にも潤うような展開になることを期待しています。私の活動も始まったばかりですが、復興推進コンソーシアムを通じて現地の情報を共有しながら、復興の力になっていけたらと思います。

●

島田　文化芸術が地域に根付いていく基盤を考えると、国や行政、復興基金などによる支援は、人間に例えれば骨格です。また、企業の社会的貢献や社団法人・協議会等を通じての支援は筋肉で、アーティストやアートNPOによる支援活動は静脈や動脈にあたります。さらに、多くの無名の市民や組織化されていないアーティストによる文化芸術の支援活動があり、これは毛細血管です。こうした骨格や筋肉、動脈、静脈、毛細血管のバランスよい存在が、地域の文化芸術活動を活性化させ、奥行きを与えます。

私は研究者ではありませんが、神戸淡路大震災後、震災とアートをテーマに考え続けてきました。その集大成として、ひょうご震災記念21世紀研究機構の『災害対策全書』のなかで、私が実践した文化芸術支援策や課題などを記しました。全文をギャラリー島田のホームページに載せてありますので、ご覧いただければと思います。

現地の声に応えた協働を

本杉　いかに地域の人々と一緒に継続的に活動をしていくか。現地に入った僚友たちと話しますと、支援者側と現地側の間に軋轢が起こる活動も少なからずあるようです。継続的に文化芸術活動を地元の人たちと協働していくには、なんらかのシステムが必要です。

また、被災地にはさまざまな年代の方たちがいます。現地調査でも、子どもに多く接するような支援活動をしている人ほど20年くらい先までを見据えて活動しており、高齢者に接する時間が長い人は、もう時間がないという切迫感を持って日々の活動にあたっている傾向が見られました。現地では、多様な活動のテンポや展開が必要とされているということです。

●

大澤　震災半年後ぐらいから、各被災地である程度大型の演奏会を開くようになりました。そのポスターには仙台フィルコンサートとは書いているものの、私どもだけで演奏する時間よりも、地元の人たちとコラボレーションする時間の方が長い構成だったりします。たとえば、『第九』のあとに『上を向いて歩こう』を歌ったり。そうしたプログラムにすることで、私たちが触媒となり、それぞれの地域の音楽家や団体の方々がご自身の音楽で元気になるためのコンサート

になっていったのだと思います。

紺野　被災地では、この1年間、本当にたくさんのイベントや公演があったそうです。ただ、現地の方から「公演を実施してくれるだけでもうれしいのだけれども、自分たちが参加できるような交流ができれば……」という声が聞かれました。ですから、私たちの陸前高田の公演では、ワークショップを行ったり、舞台の最後に地元の方たちとの合唱を入れました。

公演後には交流会も開きました。その席では、仮設住宅に住む皆さんが3月11日の状況を時折笑いも交えて話してくださいました。「1年たって初めて、あの日のことをこんなふうに笑って話すことができた」と話す方がいらっしゃったのが印象的でした。

支援で一番求められるのは、見えないものを見る力、想像力ではないかと思います。沿岸地域の根こそぎ無くなってしまったまちを見て、そこで暮らしていた人々の暮らしを想像できるか。たくさんの瓦礫を見て、それがただの瓦礫ではなく、人々の生活の証、日常生活の思い出であるということを想像できるかどうか。その痛みを共有し、寄り添うことができる人たちが増えることを願っています。

赤坂　今、被災地でアートに求められているのは、被災地の人たちの痛みに寄り添いながら、そこから何かを生みだし、形にしていくということです。これには時間がかかります。復興推進コンソーシアムには、演劇や朗読、美術、音楽など多様な分野で始まるそうした活動を積極的に応援していただきたいと思います。

近藤　支援する側が良いと思っても、それをそのまま被災地の方々に押しつけることはできません。かといって、待っていれば、被災地から具体的な支援要請が出てくるということでもありません。現地の方々の文化芸術における潜在的な求めをどうつかんでいくか。これは大きな課題です。

復興推進コンソーシアムをつくったことを現地の方に心底喜んでもらいたい。それが、一番大事なことです。そういう視点で復興推進コンソーシアムを育て上げていきたいと思います。ぜひ、皆様のご支援をお願いします。

いかに継続的に活動をしていくか――。子どもや高齢者、さまざまな年代に応じた活動のテンポや展開が必要とされています。

本杉 省三
もとすぎ・しょうぞう（モデレーター）

日本大学理工学部建築学科教授。第二国立劇場字準備室設置に伴い文化庁非常勤職員を務めた後、81-83年ベルリン自由大学演劇研究所留学、ベルリン・ドイツオペラ等の技術部で実地研究。新国立劇場、愛知芸術文化センター、新潟市民芸術文化会館、なら100年会館、ビッグハート出雲、アルメラ市芸術センター（オランダ）等の劇場計画に関わる。劇場建築家として被災した文化施設の現地調査を実施。

photo/Masahiro Shidara（シンポジウムの写真すべて）

民謡　～故郷を想う～

シンポジウムでは、福島県浪江町出身の民謡歌手であり、復興推進コンソーシアム設立の賛同者でもある原田直之氏が『相馬流山』や『新相馬節』を披露しました。18歳まで浪江町で育ったという原田氏は、避難所に赴いて民謡を唄ったこの一年を振り返り、故郷復興に向けた想いを強く語りました。

「津波で町は壊滅状態。仲間の民謡歌手たちもちりぢりになっています。自分たちにできるのは郷土にある民謡をしっかり唄い、被災した皆さまに少しでも勇気と希望を与えることです。相馬地方の人はみんなこの『流山』を小さいときから聴いて育ちました。この民謡のもつ美しい故郷が再び戻るように祈りながら、故郷を想い続けてこれからも唄ってまいりたいと思います」

「文化芸術による復興推進コンソーシアム」への

■文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局

日頃より、文化芸術の振興に対し、ご理解、ご尽力を賜り深く感謝しております。

昨年の震災後、文化芸術関係の団体等が集まり、復興支援のために文化芸術に何ができるかを意見交換したことをきっかけに、文化庁の呼びかけにより関連団体が協議を続け、コンソーシアムの設立を目指してまいりました。

コンソーシアムは平成24年2月に準備委員会を設置し、3月には設立の記者会見、シンポジウム等を行いました。今後、4月以降に運営組織を立ち上げ、具体的な取り組みを開始いたします。

つきましては、「文化芸術による復興推進コンソーシアム」にご賛同いただける方の登録を開始させていただきます。

コンソーシアムは被災地の文化芸術による復興推進を目的とし、文化芸術に関わる様々な団体、個人の方々が集い、繋がり、力となっていく組織です。下記及び同封の資料等をご参照いただき、コンソーシアムへのご賛同登録についてご検討いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

多数のお申込をお待ちしております。

記

1．組織の名称　文化芸術による復興推進コンソーシアム

2．目　的

文化庁、地方公共団体、芸術家、芸術団体、文化施設、助成財団、企業、ＮＰＯ法人、芸術系大学及び文化ボランティアなどが東日本大震災被災地の復興・再生の状況や被災者の求め等について情報を共有し、それぞれの特性を活かしながら、密接な連携協力のもとに文化芸術活動を展開することによって、被災地の復興に寄与することを目的とします。

3．活動の基本スタンス

・被災地と十分に連携・協力し、被災地から真に求められ、喜ばれる、質の高い支援を行います。
・一時のパフォーマンスで終わることなく、じっくりと息の長い継続的な支援を行います。

4．主な事業内容

「つどう」「つなぐ」「つたえる」「しらべる」「つづける」をスローガンに下記の事業を実施します。

(1) 現地調査に基づく、文化芸術による復興推進に関わる情報・ノウハウ等の提供
(2) 関係者・団体・機関による人と組織のネットワークの形成
(3) 的確な状況把握に基づく、被災地の求めに応じた文化芸術の活動環境づくり
(4) 総合的で双方向的な支援情報ネットワークの形成

5．設立に向けての活動状況

① 設立準備委員会

文化庁の呼びかけにより下記団体を構成員とする、文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備委員会が平成24年2月29日に発足しました。

設立準備委員会構成団体

文化庁、（一社）日本音楽著作権協会、（公社）日本芸能実演家団体協議会、（社）全国公立文化施設協会、（公社）企業メセナ協議会、（国）東京藝術大学、（独）日本芸術文化振興会

ご賛同登録のご案内

② 文化芸術による復興推進コンソーシアムの設立記者会見及びシンポジウムの開催情報

平成24年3月13日午後1時より東京国立博物館の平成館小講堂において、本コンソーシアムの呼びかけ人およびご賛同者による記者会見が行われました。続いて大講堂において設立シンポジウムを開催いたしました。

その模様はコンソーシアムのホームページ（http://www.bgfsc.jp/）よりご覧いただけます。

現時点でのご賛同者

コシノジュンコ	デザイナー
小林　研一郎	指揮者
紺野　美沙子	俳優／朗読座主宰／国連開発計画（ＵＮＤＰ）親善大使
新沼　謙治	歌手
西田　敏行	俳優
原田　直之	民謡歌手

ほか（５０音順、敬称略）

6. コンソーシアムへのご賛同登録をお願いする対象

・コンソーシアムの趣旨に賛同し、現に文化芸術を通じた復興推進活動を行っている、またはこれから行おうとする団体・個人

・コンソーシアムの趣旨に賛同し、同種の活動を財源的に支援する団体・個人

・文化芸術以外の分野で復興推進活動に取り組んでいる団体・個人

7. 費用について

コンソーシアムへのご賛同登録に関わる経費は無料です。

8. ご賛同登録をいただく皆様へのお願い

各参加団体(者)の皆様の活動情報を当コンソーシアムの情報サイトに掲載いたします。最新の情報を収集し発信していきたいと思いますので、情報の提供等をよろしくお願いいたします。

コンソーシアムはゆるやかな連携組織です。今後実施する活動や事業への積極的な参加をお待ちしております。

9. お申込方法

「文化芸術による復興推進コンソーシアムご賛同登録申込書」にご記入のうえ、下記の宛先までFAX、メールまたは郵送にてお送りください。

また、コンソーシアムのホームページのフォームからもお申込みが可能です。

なお、お申込み受付完了のご連絡はいたしませんので、ご了承ください。

【連絡・問合せ・申込み先】　文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局

〒104-0061　東京都中央区銀座2-10-18　中小企業会館4階

（社）全国公立文化施設協会内

【Tel】03－6278－7820　【Fax】03－6278－7821

【E-mail】info@bgfsc.jp　【URL】http://www.bgfsc.jp/

文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局　宛

FAX番号　03-6278-7821

文化芸術による復興推進コンソーシアムご賛同登録申込書【個人用】

申込日：　　年　　月　　日

「文化芸術による復興推進コンソーシアム」の目的、活動等に賛同し、登録を申込みます。

※印は必須

ふりがな ※ 氏　　名 （芸名・ペンネーム等）	
※ 住　　所	〒
職　　業	
ホームページ	http://
※ 電 話 番 号	
F　A　X	
E - m a i l	

※原則としてご賛同登録いただいた方の氏名については、ウェブサイト等で公表させていただきます。
公表を希望しない場合や、表示に指定がある場合は、下記にご記入下さい。

□　氏名の公表を希望しません。　□　芸名・ペンネーム等での公表を希望します。

□　右の表示での公表を希望します。（表示氏名：　　）

※上記目的のほか、お名前やメールアドレスなどの個人情報は、ご本人へのご連絡や情報提供のために利用させていただきますが、目的以外の利用は一切いたしません。

◆ あなたの活動についてお知らせください。

□　被災地への復興推進活動を既に行っている。

□　今後、被災地への復興推進活動を行いたいと考えている。

既に復興推進活動を行っている場合は、その内容等をご記入ください（欄が足らない場合は別紙にしてください）。また、活動報告等の資料がある場合は、併せてご送付ください。

コンソーシアムの活動に対する、ご意見ご要望等がありましたら、ご記入ください。

文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局　宛

FAX番号　03-6278-7821

文化芸術による復興推進コンソーシアムご賛同登録申込書【団体・企業用】

申込日：　　年　　月　　日

「文化芸術による復興推進コンソーシアム」の目的、活動等に賛同し、登録を申込みます。

※印は必須

※　団体（企業）名（ふりがな）	
※　代表者名（ふりがな）	
※　所在地	〒
ホームページ	http://

担当者（連絡先窓口）

※　担当者名（ふりがな）	
※　所属役職	
※　電話番号	
※　ＦＡＸ	
※　E-mail	

※原則としてご賛同登録いただいた団体・企業の名称については、ウェブサイト等で公表させていただきます。公表を希望しない場合や、表示に指定がある場合は、下記にご記入下さい。

□　団体（企業）名の公表を希望しません。

□　右の表示での公表を希望します。（表示名称：　　）

◆ 貴団体、貴社の活動についてお知らせください。

□　被災地への復興推進活動を既に行っている。

□　今後、被災地への復興推進活動を行いたいと考えている。

既に復興推進活動を行っている場合は、その内容等をご記入ください（欄が足らない場合は別紙にしてください）。また、活動報告等の資料がある場合は、併せてご送付ください。

コンソーシアムの活動に対する、ご意見ご要望等がありましたら、ご記入ください。

文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局

〒104-0061 中央区銀座2-10-18 東京都中小企業会館4階　(社)全国公立文化施設協会内

TEL：03-6278-7820　FAX：03-6278-7821

コンソーシアムの最新情報は
ウェブサイトでご確認ください。

http://bgfsc.jp/　search

Design by papier collé